

授業探訪

言語系科目・英語必修科目

英語 e ラーニング

～コロナ禍をコロナ果へ：新英語 e ラーニングにおける
ブレンディッドアプローチを用いた英語教育～

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室室員／
外国語教育研究センター准教授 三島 雅一

はじめに

2020年未曾有の新型コロナウイルス感染症蔓延は大学教育の在り方を問われる一大事件となった。本原稿執筆時(2020年12月)においても未だ収束の兆しが見えない。「コロナ禍」と呼称される世界中を席卷するこの一大事は果たして我々に禍のみをもたらしたのであるうか。この問いに対してあえて私は「否」と申し上げたい。

2020年春、全学共通科目言語系科目では、新英語カリキュラムの必修科目の一角として、刷新された「英語 e ラーニング」を開講した。当該コースの開発および運営責任者として、また一人の英語教員として、本稿ではこの新たな「英語 e ラーニング」について、その特徴と期待される教育的価値、そしてこのコロナ禍においてどのような授業運営がなされたのか、私の率直な所感を皆さまと共有させていただきたい。

英語 e ラーニングとは

「英語 e ラーニング」(通称 eL) という科目は、全学の1年次生必修科目として長年開講されてきた歴史がある。前身となる旧 eL¹では、ICT(インフォメーションコミュニケーションテクノロジー)の教育への応用、遠隔学習等の広がりを背景に、CALL(コンピュータ・アシステッド・ラングリッジ・ラーニング)アプローチを用いるコースとして導入された。当時でいえば最新の e ラーニングソフトウェアシステム(ALC NetAcademy 2)²を導入し、本学における約4,000人から4,500人にのぼる1年次生に対応する画期的なコースであった。

1クラス80名から200名までの履修者数という語学教育における「smaller is better」というクラスサイズの定説に真っ向から挑戦する斬新なコース設計が試され、都市部の大学である本学における物理的な制限に起因する各種の問題(教室の確保、授

1 本稿では、新・旧 eL として 2019 年度以前の eL と 2020 年度から開講された eL を区別する。

2 リーディングおよびリスニング力を伸ばす課題群と TOEIC 演習問題から構成されたサーバー設置型英語学習ソフト

業の少人数化の難しさ、担当教員の充足) に対応しつつ、コミュニケーションやインタラクティブがより重要な他の英語科目における少人数化を可能にした。

加えて eL における教育目標の柱として「自律能動的」な学習者の育成が挙げられる。自律能動的な学習者は、自らを管理し、多彩なストラテジーを発見、利用しながら、自己の学習に主体的に関わりコントロールを図る。このような学習習慣を身に付けた学習者は語学学習のみならず、学ぶという行動そのものに自ら意味を与え、価値を見出し、個の成熟に大きな役割を果たす。

上記のような学習者の育成を図るために、旧 eL では、単位を認定する条件として、セメスターを通して一定数の eラーニング課題を授業内外の時間を利用して修了することが定められていた。これによりある程度の強制性（授業内における一定数の課題の修了）と柔軟性（授業時間外におけるプライベートな時間を用いて課題を修了）を担保しつつ、学習者が自ら採配し、時間を管理しながら、長期間持続可能な計画的学習習慣を身に付けさせる。当該科目における教員の役割は、主にモニタリングやコーチングを行う学びのサポート役であり、時にはソフトの利用上のつまづきにも対応するという、従来型のトップダウンな知識や経験の提供を行う「教員主体の学習」と相対的な「学生主体の学習」を授業運営の特色としていた。

旧英語 eラーニングの問題点

しかしながら、いかに緻密に設計された科目であっても、教育に完璧は存在しないと私は考えている。旧 eL におけるもっとも顕著な問題点は、対面授業におけるその主たる学習活動が eラーニングソフトを利用して課題をこなすという授業形態を用いていたため、学生から授業に出席しなくても課題はできるという矛盾に対する不満が根強く報告されていた。つまり対面式の授業に対して出席する意味がそもそもないという論理である。

科目の管理運営に関しても種々の問題が挙げられる。パソコンを利用し学習するという今では当然のことも、学生のデジタルリテラシースキルには差異が見られ、特に英語の拙い学生にとっては授業内における日本語でのサポートが必要であった。その対応として旧 eL では日本語が話せる英語教員を担当として割り当ててきた。その結果、時間割の作成における担当教員の配置、特に任期制教員の流動性が予測できないこともあり、日本語の話せる英語教員を安定的に適宜配置するのが難しいという運営上の問題を内包していた。

上記に加えて、長年運用してきた eラーニングソフトも、そのコンテンツが 2016 年より刷新された TOEIC に対応していない等、中心教材として継続運用するにそぐわないものとなってしまった。このような背景から、新 eL の創出にあたり、旧 eL のメリットを生かしつつ、当該科目において表出した種々の問題を解決していくことを念頭に 2018 年からカリキュラム再開発に着手した。

新英語 e ラーニング

新 eL は旧 eL の教育的柱、即ち自律的な英語学習者の育成を継承しつつ、多面的な改革を行った。まず新 eL の学習目標として実務的な英語力の育成を掲げた。英語の必要なコンテキストを考えるに、アカデミックな英語そして実用的な英語というように運用を必要とする言語能力はその使用の目的や社会的なニーズによって変化する。アカデミックな英語は無論重要であるが、それだけでは足りない。ビジネス等、将来多くの学生が必要とすると考えられる実用的な英語能力の伸長も重要である。加えて、TOEIC のようなビジネスコンテキストを意識した英語能力試験は就職活動も含め、資格として有用であることから、本コースを通して、自律した学習習慣の醸成をすること、実用的な英語能力の土台を形成すること、そして TOEIC のような資格試験に対応できる英語能力を磨くことの三つの目標を掲げた。

これらの具体的な教育目標を踏まえ、新たな e ラーニングソフトとして、イギリスに本社を置く Really English 社の Practical English 7 (PE7) を導入した。PE7 は、その名の通り実用的な英語力の育成を目的とした英語学習ソフトで、診断テストの結果から個々の学生のレベルに応じた課題が、文法、リーディング、そしてリスニングという 3 つのカテゴリーにわたり提供される。一つ一つのレッスンユニットの最後には修了テストが設けられており、これにパスしない限り当該のレッスンを修了したとは記録されない。このようなソフトウェアの特徴を利用し、成績評価においては、「～数のレッスンを修了すること」のように単位取得の最低条件を定め、学生は学期末までに必ず一定数のレッスンを修了しなければならない。これにより多くの e ラーニングソフト全般において顕著にみられる「クリック＆ゴー」で実際に学習を行わずレッスンを先に進めようとしても、レッスン修了テストにパスできない。そのため、学生は真面目に学習を行うことが求められる。

先に述べた学生からの不満に対するレスポンスとしても、一般的な e ラーニングソフトがそもそも前提としている「オンラインによるどこでもいつでも学習が可能」というメリットを全面に押し出し、対面式授業による利用を行わず、授業外での継続課題として利用するよう改めた。当該ソフトは学内へのサーバーの設置を必要としないオンデマンドのクラウド型サービスであり、各種のモバイル端末用のアプリも提供されており、インターネット接続と、デバイスさえあればいつでもどこでも学習ができる仕様³となっている。

また教員配置の問題に関しても、ソフト提供元と協力し、日英のマニュアルやスライドを作成し、教員に対しては当該コース運営に関する教員用のハンドブックを作成・配布し、予想される問題に対して予防線をはることで、担当教員の日本語能力の有無にか

3 旧 eL で利用していたソフトは、その仕様上 Windows PC および Internet Explorer でしか動作しなかった。

かわらず授業運営が可能になるよう準備した。これにより旧 eL に存在した教員配置上の制限を解決するに至った。

新 eL ではさらに、ブレンディッドアプローチの教育理論を基に大胆な授業設計を行った。このアプローチは e ラーニングによる学びと対面式の学びを有機的に結合し、学びの形態が変わっても学習における一貫したテーマを設けることで相乗効果を狙う教育手法である。新 eL は旧 eL と同様に一人の授業担当者に担当される学生数が極めて大きいので、対面式授業を行う場合に多くの制限がついて回る。特に対面式で語学学習を行うメリットを十二分に活かすために、可能な限りインタラクティブなもの、そして教員視点からいえば学生への関わりをできるだけ大きくできるように、1 クラスを4つのグループに分け、セメスター初週のオリエンテーション以外は指定されたグループのレッスンにのみ対面式で出席するという設計を行った。つまり学生はセメスター 14 週の内、合計で 5 回の対面式授業に出席をするのみとなり、それ以外の週はすべて e ラーニングソフトでの課題を継続的に行うこととした。対面式のグループレッスンではコース目標の一つである実用的な英語力の伸長というテーマに基づき、とりわけビジネス英語に特化したオムニバス形式のレッスンを実施する。レッスンの内容は個々の担当教員の采配に任せつつも、eL コース委員会からすぐに利用できるレッスンプランと教材を予め準備し共有することで、教員の創造性や独自性を担保しつつ、授業準備の負担を軽減するよう配慮した。

新英語 e ラーニング開講結果

およそ 2 年の歳月をかけ入念な準備を行ってきた新 eL であるが、果たしてコロナ禍における初年度のコース運営状況はどうだったであろうか。コース開発そして運営の責任者として新型コロナウイルスにおける全面オンライン授業実施決定の知らせを受けた際は、大きな負担を感じたというのが率直な感想である。しかし新 eL はその設計上、オンライン授業として実施するのに非常に親和性が高い。ふたを開けてみれば、オンライン授業に対応するという意味での調整はセメスターが 12 週に縮小されたことに伴うグループレッスン回数の見直しと、本来対面式で行われるレッスンがオンライン化したのみに留まり、結果として最も安定した運営が可能な授業となった。また当該コースの肝である、e ラーニングソフトにおける課題の修了率をみると、全受講者のおよそ 96% が修了という驚異的な数値をたたき出した。

また委員会を実施した授業評価アンケートによる受講者からの回答（約 3,700 名分）結果を見ると、科目の目標の一つである「自律した英語学習習慣をつける」に関連する設問に対し、70%以上の受講者が「そう思う」あるいは「強くそう思う」と回答しており、概ね目標の一つを達成できたのではないかと考えている。グループレッスンに対する評価も約 60%の回答者が「満足している」あるいは「強く満足している」を示しており、オンライン授業によるグループ授業においてもある程度の結果が出せたのではないかと

考えている。また科目目標の明確性、授業運営の計画性、学習量の3項目においても80%以上の学生が肯定的な評価を示していた。しかしながらオンライン学習におけるTOEIC対策としての有効性に関しては、50%強の学生が肯定的な回答をしているのに対し、残り半数の学生は「どちらともいえない」あるいは「有効ではない」を示しており今後の課題として挙げられる。

禍転じて

本稿では全学共通英語科目の新英語eラーニングの歩みと初年度開講結果を紹介させていただいた。新型コロナウイルスという巨大な禍に対し、素晴らしい結果を残せたのではないかと感じている。これはひとえに、カリキュラムの改定から開講まで陰に陽に奔走してくださった教職員の方々の尽力、そして授業を担当していただいた先生方の不断の研鑽の賜物と深く感謝を申し上げたい。「知者の事を挙ぐる（あぐる）や、禍を転じて福となし、敗に因りて功をなす」とは中国春秋時代『戦国策』を原典とする故事である。禍を禍とせず、全学が一体となって未曾有の果実を満天下に示し行くことを強く期待している。

みしま まさかず